

「流通の歴史地理」の刊行にあたって

ここに歴史地理学紀要第三集をおくることになった。第一巻の「本質と方法」について、第二巻以後はその各論ともいうべき具体的なテーマをえらぶこととした。第三巻の「流通の歴史地理」は第二巻の「地域の変貌」につづくものである。

「流通」はきわめて広義に考えれば、すでに人類生活の発生の当初にみとめ得ようが、これはともかくとして、自給自足時代をすぎると流通現象は著しくなり、資本主義経済の段階に入って隆昌をきわめる。そして余剰生産・注文生産を経て、需要を予想しての見込生産に進む。これにともなって流通機構は整備され、生産と消費とを結合する市場の機能は重要性を増しその中核として成長してくる。

ここにおいて、史学界にあつては、つとに商業史の研究が行われ、われわれはすでに明治中期の横井時冬博士の日本商業史をはじめとして竹越与三郎・本庄栄治郎、さらに豊田武・宮本又次等諸先学の業績を得た。そして商業史の一般の趨勢・変遷にはじまり、さらに商業機構・その各過程における金融・資本形成、また取引市場の機能についての分析に接することを得た。また最近にあつては歴史学研究会の青壮グループによる流通過程の分析と、各時代のもつ政治的背景との結合関係を主題としたユニークな研究に接している。

また流通については、その過程をやや広くみると、取引市場の所在する集落・都市、さらに物資の流通施設とし

ての陸運・海運の交通等関連的に究明を要する部面がまた広い。この面についても史学・地理・交通・経済・都市など諸学界において数多くの業績に接し、最近は流通系統、さらに技術面に結びつけた経営面についての詳密な研究にも接し得るにいたっている。

歴史地理学の研究における基本的態度については、すでに本紀要第一巻において詳述されているが、要するに各時代における社会現象の実態の究明とその時代における地域的意義づけにあり、とくにその地域との結合せしめた意義づけを中心課題とし、さらにその理論構成を終極課題としている。そしてその研究対象は、狭義の流通過程における取引市場のみならず、集落・都市・交通など関連諸機構にもひろげ、その実態の把握、その意義づけにあたっては、それぞれの時代における地域的な比較関連を通じての究明を中心の態度・方法とするものである。

第三巻は、こうした意図のもとに、会員が内外の諸地域についてとりくんだものである。未開拓なこの分野のパイオニアたらんことを期している。斯学の発展のため、忌憚なき叱正を望んで止まない。

一九六一年四月一五日

浅 香 幸 雄